

京都、大阪、等の地名をきり出して説明するものいゝ。

月の兎

相馬御風氏の作、「良寛さま」の中の一文である。月と兎

観 察

第一週

こほろぎ、ばったこそれ等の巢

(年少組の記事参照)年少組に於てはまだ巢いふ處まで観察するまでにならない。が年長組にもなれば當然の様に子供の方から巢いふこゝを考へてそれをたづねようとする。さうしたら一緒にさがさう。その時、こんなものに興味をもつ機會の少い女兒をも必ず共にし度いものである。こほろぎも、ばったもその巢を草の間、物の蔭なぎに土に穴をあけて營む。拇指大のそんなに深くない穴である。草の間が靜な時巢の外に出て陶然として翅をこすつて鳴いてゐる事がわかる。

蟬

の話はいろくあるが、かういふ權威ある作者の話をお聴かせる方がいゝと思つて選んだ。

夏の景物蟬を観察させるにはさうしても九月になつてからになる。都會の幼稚園では捕へるのに一苦勞であらう。私達の幼稚園では鈴懸にも櫻にもよく來て鳴いてゐる。子供達がつかまへる。さうしたらさつきの鳴聲を外觀を結びつけて観察させる。みんな「蟬かつくつく」ぼうしをか、ひぐらし蟬か油蟬か知つてゐる蟬の名を言はせ鳴聲について話し合ふ。夏の早い頃に、又今の頃でも蟬のぬけ殻を見付けたらとてもよい觀察の機會となる。蟬のぬけ殻を観察させる事は時刻的に時間的に不可能だから話と共にせめてよい繪又は寫眞の記録なきをみせるこゝい。ぢむし—さなぎ—蟬への變態を通していつもの知りたいたい心はむくむく成長してゆく。

ひまわり

夏らしく、丈高く大輪のだらかなよい花。この大きさを愛し度い。これでは一般の菊の花との類似を注意しよう。

種子をも忘れずに観察させよう。

第二週

朝顔の花と實。

(年少組参照)實は子供達に一しよに收穫する事によつてより具體的に活動的に觀察出来る。黒い一つの種子を先生がきつてみて中の子葉を指示し、これが種子をまくこのびてあさがほの雙葉になる事を話す。

おみこし

(年少組お祭参照)おみこしのかざりの美しさを観たあこ

手
技

第一週

自由畫 三回

自由畫でかゝせてみる。するま子供のみるまころ、一人一人についてのみ方を知る上の好資料にもなる。

第三週

ふよう

あふひ科の植物である。この頃咲く木の花として典型的なものであらう。ぬりゑにある處からそれはこの花であるまいふ程度にする。

梨

實りの秋、色のいゝ果物が多い。梨に限らずようやく色つきはじめた柿もそれから栗も同じ意味をもつ材料として取扱ふ。一つには觀賞、一つには種子の比較。朝顔の時の如く中の子葉をみせる。幼稚園で味はひはまうであらうか。

夏休み中の見聞畫

年少組の時にもかゝせたがこの期になれば觀察範圍も廣